

第18回石井十次顕彰のつどい

2月3日(日)中央公民館ホールにて開催いたしました。

記念講演で、高鍋町在住の宮崎県文書センター主席運営嘱託員をしておられる永井 哲雄先生が『高鍋藩の貧しさが育てた生きる知恵と仁慈の心』と題して記念講演をしていただきました。



西小学校6年生による児童劇「最初の孤児」

その後高鍋西小学校の5、6年生による資料発表と『最初の孤児』の児童劇を行い、おいでいただいた皆さんはもとより町民の皆さんの期待に応えるすばらしい顕彰のつどいことができました。

次回も町民の皆さん方の、多数の出会いを期待いたします。



多額のご寄付をいただき ありがとうございます。
厚くお礼申し上げます。

寄付者報告第17号

● 19. 12. 12～20. 12. 10

篤志寄付

高鍋町	黒木本店	黒木 敏之
高鍋町	館野	キミ
高鍋町	永井	哲雄
宮崎市	印刷センター	クロダ
	原田	安政
宮崎市	藤井	慶一
高鍋町	皆川	雅之
高鍋町	増田工務店	増田 秀文
高鍋町	堂嶋	稔
日向市	熊本	英一
高鍋町	高鍋信用金庫	井手口 健二
高鍋町	坂田病院	坂田 師通
高鍋町	長尾	輝
高鍋町	立正佼成会	岩崎 隆一

高鍋町	フクモト事務機
	福本 良幸
高鍋町	黒木 静範

忌明寄付

高鍋町	長谷川	永	伯子
高鍋町	茂木	順	子
高鍋町	岩岡	保	宏
高鍋町	長尾	輝	強
高鍋町	館野	強	子
高鍋町	増田	茂	子

あとがき

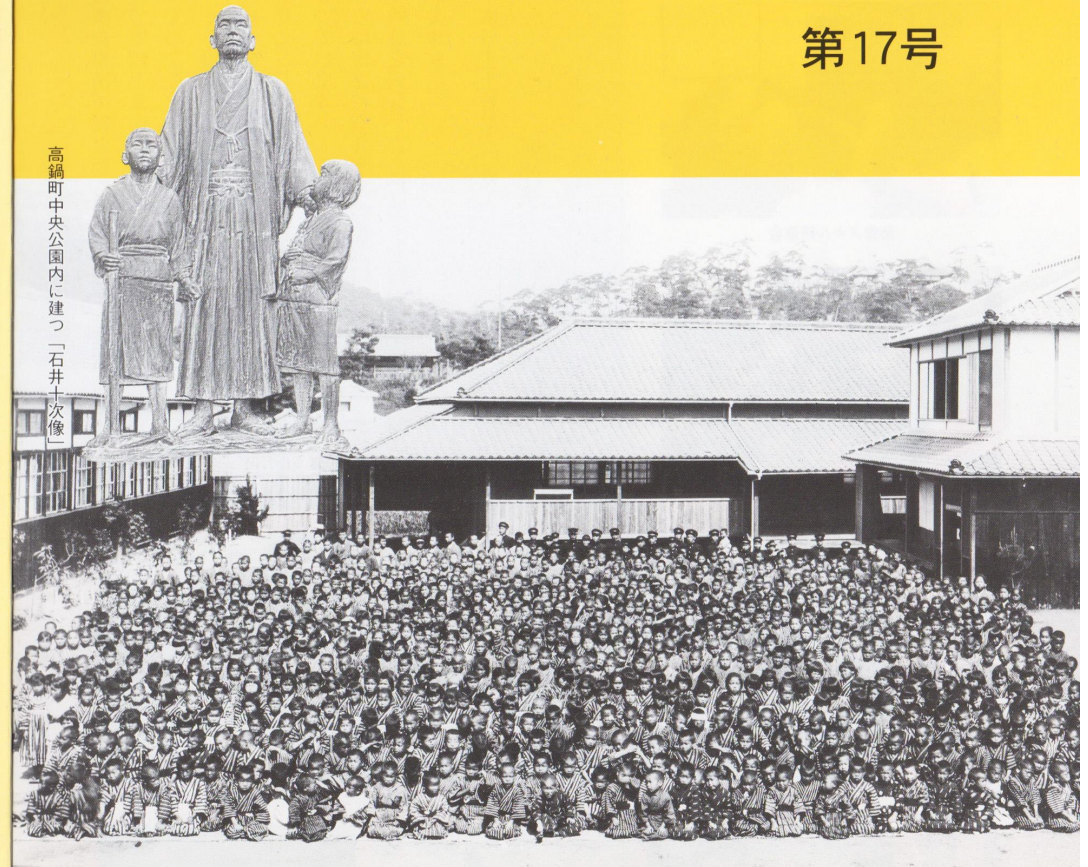
世界の経済不況によって、国内経済も思うように行かない現状で、物価の高騰など生活に多大の影響を被っている昨今です。
日々、何かと暗いニュースが多く、心のすきみが感じられます。顕彰会も、こうした乱れた心をとりもどすべく、石井十次の慈愛の精神をひらめくべく努力はしております。ご理解とご協力をお願いいたします。
『顕彰会だより』第17号をお届けいたします。

財団法人 石井十次顕彰会

〒884-0006
宮崎県児湯郡高鍋町大字上江8113番地
TEL 0983-23-4312

石井十次顕彰会だより

第17号



高鍋町中央公園内に建つ「石井十次像」

1200人余りの孤児で一杯の岡山孤児院(明治39年・西暦1906年)

財団法人 石井十次顕彰会



今井 鎮雄 理事長

第17回石井十次賞

井十次賞



税田理事長より賞状を橋本 明事務局長へ



謝辞を述べられる橋本 明事務局長



中学校2年生へ英文石井十次物語の贈呈



中学生の意見発表

石井十次賞

社団法人
家庭養護促進協会 様

孤児救済を自らの天職と定め 五十年の生涯を捧げた児童社会福祉事業の先駆者 石井十次の人類愛と社会奉仕の崇高な精神を永遠に継承し 愛の心 思いやりの心を全国に広めるために石井十次賞を制定しました
貴協会は 里親制度への理解と里親教育のいっそうの推進発展を目的に一九六〇年に発足し日本で唯一の里親さがしのための民間の社会福祉機関として活躍を続けています

さまざまな事情で親と暮らせない子どもたちを地域一般の家庭で家族と共に育っていくことを願い里親家庭の養育をすすめ支援する活動 子どもの養育や家庭での問題についての相談支援など市民活動として愛の手運動を半世紀に亘って展開してこられました
これまでに二千人を超える子どもたちが里親親親の家庭で育っています
このことはまさに石井十次の理念に沿った偉業であり心から敬意を表し ここに第十七回石井十次賞を贈り功績を讃えます

平成二十年四月十一日

財団法人 石井十次顕彰会
理事長 税田 格十



養育スキル研修会



里親制度研修会



ぼちぼち子育て講座



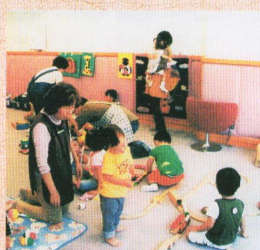
里親サロン ハートフルクリスマス



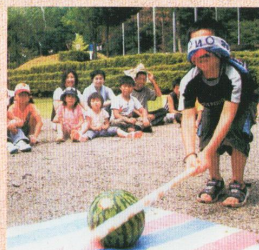
チャリティ映画会 お楽しみタイムでのじゃんけんゲーム



保育ボランティア養成講座



保育ボランティアによる一時保育



ぼんぼきゃンプ



バザー

平成四年の第一回石井十次賞（北海道家庭学校）以来、第十七回（社団法人 家庭養護促進協会）となり、平成二十年四月十一日に、その贈呈式を行いました。併せて、当日会場で発表された小中高校生の文章をお届けします。

「第17回石井十次賞」受賞協会紹介

『第17回石井十次賞』候補者募集を、平成19年12月20日を期限とし全国都道府県政令指定都市の社会福祉協議会及び個人推薦人にお願ひしました。応募のあったその中から平成20年2月19日、東京都において、選考委員会を開催し、審査の結果下記の協会に決定しました。



社団法人 家庭養護促進協会

理事長 今井 鎮雄

住所 〒650-0016
神戸市中央区橘通3丁目4の1
神戸市総合福祉センター2F
社団法人 家庭養護促進協会
TEL(078)341-5046

【受賞協会紹介】

〈活動経歴〉

- 1960年 神戸市で家庭で育てることが難しい子どもたちを施設で養育するのではなく、地域の一般家庭で養育することを進めるため「家庭養護寮」が創設され、家庭養護寮の開拓をすすめるための任意団体「家庭養護促進協会」が発足。
- 1962年 神戸新聞紙上で里親を求めている子どもを紹介する「あなたの愛の手を」、続いてラジオ関西でも「里親さがしの時間」がスタート。公立の児童相談所と新聞・ラジオのマスコミの協力を得て里親開拓をすすめる「愛の手運動」が始まる。
- 1964年 神戸に続いて大阪でも毎日新聞の協力を得て「愛の手運動」がスタートし、大阪事務所が活動を開始。社団法人「家庭養護促進協会」が設立され、厚生省から「民間家庭児童相談室」の認可を受ける。
- 1979年 大阪市城東区に協会付属のファミリーグループホーム「ふれあいの家」を開設
- 1983年 里親家庭のリクレーション活動に関わるボランティアリーダーのグループ（中学生以上の里子や養子を含む）が「グループぼんぼこ」になり活動を開始（神戸）
- 1987年 「思春期妊娠危機センター」開設（大阪）
- 1989年 「はーもにい親子問題相談センター」開設（神戸）
- 1995年 阪神淡路大震災から10年間、仮設住宅で暮らす親子のための「もみの木ひろば」を開設（神戸）
- 2003年 乳幼児を育てる里親を支援する「里親サロン」開設（神戸）
- 2004年 地域の家庭を対象にした子育て支援プログラム開始（神戸）
- 2005年 保育ボランティアと母親たちのグループが「子育てサポートグループぼちぼち」となり活動を開始（神戸）。
里親・養親が子ども連れて参加する広場「JBクラブ」開設（大阪）
- 2007年 年長児を養育する里親を支援する「神戸里親塾」開設（神戸）

日本で唯一の里親さがしのための民間の社会福祉機関として活動を続けており、これまでにこの運動を通して2100人を越える子どもたちが、里親・養親の家庭で育っている。



目指すは石井十次先生

高鍋東小学校 5年 矢野 綾香

わたしが、初めて石井十次先生のことを知ったのは、小学一年生のときでした。石井十次先生のことを知ったきっかけは、十次先生の一生をえがいたえいがでした。そのえいを見たとき、

「わあ、少ない人数でたくさんの子供達を育ててすごいなあ。」

と思い、十次先生のい大きさを知りました。

わたしの学校は高鍋東小学校ですが、宮崎県で初めて作られた明りん堂の流れを受けついで学校であることを、四年生の社会科で学習しました。その明りん堂で学んだのが石井十次先生です。教室には、十次先生のしょうぞう画があります。そのとなりには、十次先生のうたがあります。それには、「孤児のため いのちを捨てて働かん 永の眠りの床につくまで」と書いてあります。このうたは、自分よりも人をゆう先させなさいと言っているようなうたです。だから、わたしはこのうたのように、自分よりも他の人の方を大切にすることを見習いたいです。この目標を達成するには、これまでの自分の事を変えなければいけません。

一つは、友達に思いやりをもってせつする事です。わたしは、今まで友達にはやさしくせつしてきたとします。しかし、今後からは今までよりもっと友達にやさしくせつしたいとします。

二つめは、ゆめに向かいくじけない事です。わたしのゆめは、メイクアップアーティストになることです。この先、何かおもしろい事でわたしはくじけるかもしれません。しかし、十次先生は様々なこんなにも負けずに孤児を育てることをつらめき通しました。だから、わたしもゆめの実げんに向かってがんばるつもりです。

もうわたしは五年生です。だから四年生のときより朝のボランティア活動に積極的に参加し、学校をきれいにしようと思います。また、下級生にもいろんな事を教えてあげたり、やさしくしたりしようと思います。石井十次先生にはかなわないかもしれませんが、石井十次先生のような強くやさしい心はもち続けていくつもりです。



石井十次先生から学んだこと

高鍋東中学校 2年 鈴木 鮎 香

——「多くの孤児を救った偉大な人」——

これが私の思う石井十次先生です。私と十次先生の接点は三つあります。

一つ目は、小学校1年生の時です。初めて入った教室には男性の絵が飾ってありました。先生は、「この人は石井十次先生といって、高鍋の偉い人なんだよ。」と教えてくださいました。これが十次先生と初めての出会いでした。

二つ目は、小学校5年生の時です。総合的な学習の時間に、劇や紙芝居を作りました。そのとき初めて、十次先生が多くの孤児を救ったことを知りました。

三つ目は今回の意見発表です。意見文を書くため、先生に「石井十次小伝」を貸していただきました。これが、十次先生のことを深く知る機会になりました。

「石井十次小伝」を読み、印象に残ったのは、あの有名な「縄の帯」の話です。母が忙しい合間をぬって作ってくれた紬の帯を、困っていた友だちの松ちゃんにあげてしまいます。困っている人に手を差し伸べる十次先生の優しさに胸を打たれました。

十次先生のことを知るにつれて、今の社会では、一人一人が困っている人に手を差し伸べる優しさをもつことが必要だと、私は思いました。これは、学校生活の中にも感じることもあります。

例えば、休み時間。誰かのプリントが落ちているのに、誰も拾おうとしません。見えているのに気づかない状況があります。みんな、相手のことを考えようとしなくて、つまり、無関心なのです。このようなことが原因となって、社会の中で、いじめや犯罪などが起きています。

ところで、私が中学1年のときの学年目標の中に、「仲間とつながり高め合う」という一節があります。1年生のとき、私は学級委員長でしたので、学年委員会のメンバーの一員として活動していました。この目標を立てたのは、相手の立場や状況を理解し、声をかけてほしいという思いがあったからです。実際にこの目標を立てて、みんな少しずつ声かけができるようになってきました。

今、私たちに必要なのは、友人などの自分の周りにいる人の立場や状況を理解して接することだと思います。私も、これからは周りに気を配り、困っている人がいれば手を差し伸べられる、石井十次先生のように優しい人になりたいです。



石井十次先生との出会い

高鍋農業高等学校 畜産科3年 松田 慈 司

私は、延岡市の出身で中学を卒業後、高鍋農業高校に入学しました。日曜日になると実家から寮のある高鍋町に帰って来ます。高鍋駅を降りるといつも「孤児の父」と書かれた大きな石碑が目に入ってきます。これが私が石井十次という人を知ったきっかけでした。

私は、畜産農家の生まれで、わが家では、牛を飼育しており、毎日毎日がいのちのちがふれ合う農業の営みの中に、父母が熱心に仕事をする後ろ姿を小さいころから見て育ちました。

「あーい牛の子が生まれるぞー」と慌ただしく話す父に呼ばれていって見ると、母牛が必死になって子牛を産もうとしているところでした。徐々に陣痛が強くなり、前足がでてきたところを、子牛の足にロープをつけて父と一緒に引っ張り上げました。やっとの思いで子牛を引っ張りだすことができました。

母牛は、生まれたばかりの子牛を丁寧に自分の舌でなめ、子牛を気遣うようにして子牛が自分の足で立つのを待ちます。これが、母牛が初めておこなう母牛の役割だと、そしてこのことを人間がしてしまうと母牛はあまり、子牛に愛着を示さないようになってしまうと父から教えてもらいました。

子牛は、自分で立って母牛の乳を飲むようになると、母牛に離れないようにいつも一緒に行動するようになります。こんな微笑ましい光景を幼いころから見て育った私は、生命って素晴らしいと、また親子のきずなの深さを感じ取ることができました。

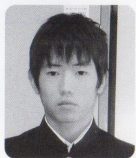
このように頼る者と頼られる者、この関係無しにはいのちのリレーは成り立たないと言うことに気付きました。そのために、私たちはその牛たちが元気に育つようにしっかりと管理を怠りなくしていかなければならないという、命を預かる者としての大きな責任を感じました。

そんな中、新聞やテレビなどで児童虐待や育児放棄と言ったことがらが報道されているのを見るたびに、いのちのちがふれあうはずの家庭でどうしてそんなことが起こるのだろうかとなにか大きな違和感を感じました。

命を預かる者として、かわいいとかいうことだけでなく生命としての尊厳を持って接することが難しいとすれば、私たちに何が欠け始めているのだろうかと思案を感じようになりました。

そんな時、石井十次先生の生涯について学ぶ機会がありました。石井先生の人に対する深い愛情と、人として生きることの責任感の強さに、心を強く打たれたことを今でも覚えています。まだ、今の時代のように福祉制度が構築される前の厳しい状況の中で、かわいそうに同情することは、だれにでもできることですが、孤児の子供達に責任をもって、さらに人として人格を大切に孤児の子供達を育てていこうとされた姿に、なにか、私の心の中で漠然としていたものの重要な答えの一つが見つけられた感じました。

私の石井先生への出会いの出発点は、畜産を学びに高鍋の地に来たと言ったことがきっかけですが、動物から生命の尊さを学ぶとともに、石井十次先生から学んだ人に対する思いやりと責任感、そして人への尊厳ということをもう一度かみしめながら、更に勉学に励み、人として思いやりや責任感を持って社会に貢献できる人間になっていきたいと考えています。



What I thought about Juji Ishii

Takanabe-higashi J.H.S.
2rd grade Tomofumi Okada

When he was six or seven years of age, Juji was dressed by his mother in a new kimono with a good belt for the harvest festival. "Now you look handsome! Why don't you go outside and play?" said his mother. Juji directed his steps toward the shrine, his heart was beating with joy. A small boy was whimpering near the gate of the shrine. "What's wrong, Matsukichi?" Juji asked. But he guessed from the way Matsukichi was dressed humbly in a torn kimono with a rope for a belt that he was being snubbed by his friends. Juji said, "Stop crying, Matsukichi." and led him over to his friends to join them and play.

In the evening, Juji went home only to be asked by his mother what had beome of his belt. Juji told her the truth honestly, though he feared that he might be told off for what he had done. But his mother gave him a gentle smile and said, "Is that right? Good for you. Matsukichi must have been very happy." His mother's response inspired Juji to begin his volunteer work.

This is a famous story. What do you think of this story? If you were Juji, how many of you would help Matsukichi? I hope a lot of people will become a kind person like Juji. Even if you couldn't behave like Juji, I think it's very important for you to have a warm heart to other people, and to help anyone who needs help.

Thank you for listening.

十次について思うこと

高鍋東中学校 2年 岡田 禎史

十次が6歳か7歳のころ、彼は、秋祭りに母に新しい着物を着せてもらい、すてきな帯をしめてもらいました。そして、「立派にみえますよ。お外へ行って遊んでおいで。」と言われました。十次は神社の方へ駆けていきました。彼の心はうれしさをわくわくしていました。すると、小さな男の子が神社の鳥居の所でしくしく泣いていました。「どうしたんだい、松吉。」十次はたずねました。彼は、松吉は、破れた着物を着ていて、帯は、なわを絞めているので仲間はずれにされているのだと思いました。十次は「泣くのをやめなよ、松吉。」と言って自分の帯と、松吉の帯を取り替えて友達の所へ連れていき、いっしょに遊びました。

夕方、家に帰ると、母に自分の帯はどうしたのかと聞かれ、正直に訳を話しました。十次は自分のしたことを母に知られると思いきびくくしていました。が、母は優しく微笑んで言いました。「そうなの。よかったわ。松吉はとても嬉しかったでしょうね。」彼の母の答えは、十次の偉業を始めるもととなりました。

これは、とても有名なお話です。皆さんは、この話を聞いてどのように思いますか。もし、あなたが十次であれば、松吉をこのように助けてあげる人はどのくらいいるでしょうか。例え、十次の様に行動できなくても、他の人達に暖かい気持ちをもって、助けを必要とする人々に接することが、とても大事なことであると、私は、考えます。



The life of Juji Ishii

Takanabe-nishi J.H.S.
2rd grade Miho Hamakawa

Juji Ishii was born in 1865, in Babanoharu, Takanabe Town, in Miyazaki prefecture. Juji was an ambitious boy and wanted to be a naval officer. So he went to a school in Tokyo called Kogyokusha, but a year later, he fell ill and was not able to fulfill his dream.

He returned to his village and decided to work on the barren land with his friends but a typhoon came and destroyed everything. He then changed jobs and worked as a secretary at the Miyazaki Police Office, but even this job did not satisfy him. One day when he was sick, he met a doctor, Dodohei Ogiwara, who encouraged him to become a doctor.

When he was eighteen years old, Juji studied medicine and Christianity at Koushu Medical Institute and went back to his hometown during the summer holidays. In his town, he established a school called Babano-haru-asaban school where young villagers could study. During the day, they would work in the fields and then study together at night. Juji was greatly respected by all the villagers.

One day Juji found a boy and a girl dressed in shabby kimonos at the temple. They looked up at Juji with fear and anxiety on their faces. The instant Juji gave rice-balls to them, these children wolfed them down. That night their mother was also at the temple. She said to Juji with fear-filled eyes, "We are living our lives as beggars with no place to stay nor relatives to rely on. Wherever we go, people throw stones at us and make us go away. Sir, we can't keep on living this way. I implore you to take care of this boy." Juji went home. His heart was full of sympathy. "Shinako, my dear, can't we do something for them?" Juji said to his wife. She answered in a compassionate tone, "Just one boy would not be too much trouble!" They decided to adopt the boy named Sadaichi and bring him up. More and more people heard about this and Juji was asked to look after many children. Later, he set up "The Orphan Education Association."

I'm proud of Juji Ishii, because he is an outstanding person who came from my town. He is one of the great men who contributed to the progress of the Japanese welfare system. Juji's statue continues to look down warmly on us. The people of Takanabe will never forget his spirit.

石井十次先生の生涯

高鍋西中学校 2年 濱川美帆

石井十次は、1865年、宮崎県高鍋町馬場原で生まれました。十次は志を高く持った少年で、海軍士官になりたいと考え、攻玉舎という学校に入りました。しかし1年後、彼は重い病気にかかり、夢を果たすことができませんでした。

十次は、郷里に帰り友人といっしょに荒地の開墾をはじめましたが、台風が襲い、田畑はすべて流されてしまいました。それから仕事を変え、宮崎警察署で書記として働き始めましたが、この仕事でさえ十次を満足させることはできませんでした。そんなある日、十次は病気にかかり、萩原百々平という医者に出会います。彼は十次に医者になるよう励ましてくれました。

18才のとき、十次は甲種医学校で医学とキリスト教を学びました。夏休みになると必ずふるさと高鍋に戻りました。そして村の若者たちのために「馬場原朝晩学校」という学校を設立しました。昼間は田畑に出て働き、夜はみんなで勉強をするのです。十次は村の人々に大変尊敬されました。

ある日、十次は寺にぼろをまとった男の子と女の子を見付けました。二人はおどおどとして不安そうな目で十次を見上げました。十次がおにぎりを差し出すと、二人は奪い取るようにして、あっという間ににおにぎりを平らげました。その夜、寺に二人の母親もいました。「わたしたちは、家も身寄りもなく物乞いをして生きています。どこへ行っても人から石を投げ付けられて追いつかれてしまいます。このままでは生きていけません。どうか、男の子だけでもあずかってください。」十次は胸いっばいの哀れみの情を満ちて家に帰りました。「品子、私たちに何かできないだろうか。」十次は妻品子に相談しました。品子は哀れんでこう答えました。「男の子だけならなんとかなりますよ。」二人はその定一という男の子を引きとり、育てることにしました。人々がこのことを聞いて、たくさんの子どもたちが十次に預けられたのでした。そして、のちに十次は「孤児教育会」を設立したのです。

私は、十次を誇りに思います。同じ高鍋町の人として、そして、日本で福祉の道を開いた一人の偉人として。十次の銅像は、これからもずっと私達を見守ってくれるでしょう。高鍋の人々は十次の精神をいつまでも忘れないでしょう。